

(2) グループディスカッションを踏まえた全体討議





金井 全体討議を始めさせていただきます。まずは一つ目のテーマ、『児童生徒の心に響く、行動を変える授業』について議論されたグループからの発表をお願いします。

中村 三重県尾鷲市の中村です。グループ3では、心を揺さぶる仕掛けについて話をしました。先ほどのビデオの授業者である田辺市の太田先生がグループにいたので、あの授業についていろいろとお話させて貰っていました。

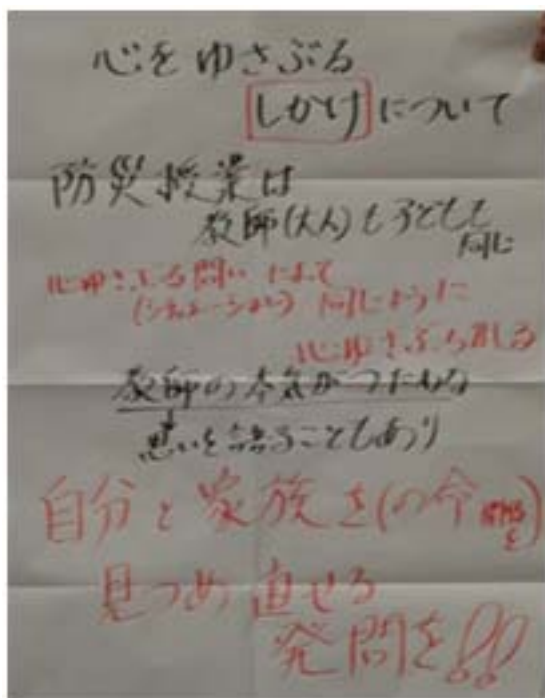
授業で、“わがこと感”を持たせるためには、「この発問自体が重たくなるのは仕方ない」という意見だとか、「あれくらい一生懸命考える、しかも自分の言葉でそれをしっかり伝えるのはいい」という意見がありました。逆に、「ああいう高め方じゃなくても高まるんじゃないか」、「この発問、厳しすぎるかな」という意見もありました。また太田先生から、先ほどの10分の映像の中で、「先生が、もしも子どもが挟まれている状況になったら、『自分も逃げられない』と子どもに言ってしまったことを反省しているとおっしゃっていました。これに対して、「子どもには『逃げなさい』と言うけど、先生自身もやっぱりそういう状況に置かれたら困ってしまうし、迷うし、放っては逃げられないという事実というか本音を言ったことは、子どもたちに、『先生も本気なんだ』、『本気でこのことに向き合っているんだ』というようにしっかりと伝わったんじゃないか」ということを話しました。「防災の授業は。他の教科と違って、『先生がいて、子どもがいる』という感じではなく、命に関しては教師も子どもも、大人も子どもも関係なく、横並び「皆経験がしたことのないなかで、想像するしかないなかで、『教師が上で、子どもが下』、は違う」という話をしました。「心を揺さぶる間によって、同じように教師側も心を揺さぶられるというのがいい」と意見もありました。先ほども言いましたが、“教師の本気度”を子どもは見ているので、「先生がどれだけ本気



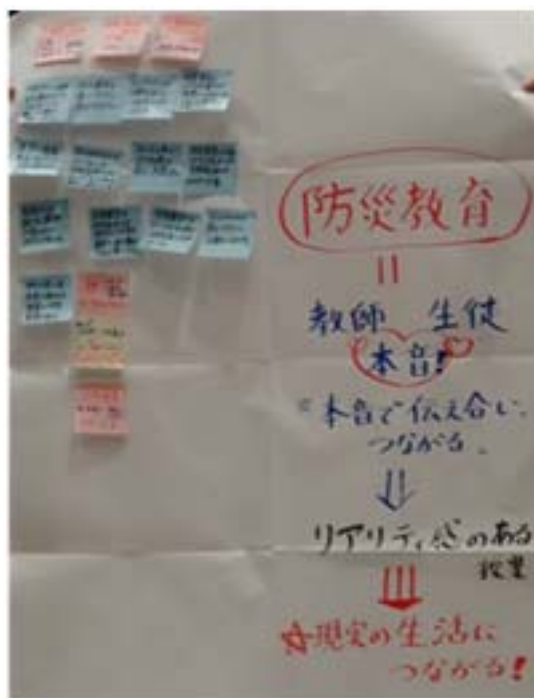
中村 佳栄先生

で、自分たちに命の大切さを伝えてくれているのか」を子どもは感じると思うので、『本気なんだ』という思いをとにかくぶつけていく、「教師が。時には自分の思いを語ることも大事な」という話もありました。

『心を揺さぶる仕掛け』について、結論としては、「“自分と家族の命”とか、“自分と家族を見つめ直せる”ような発問がいいんじゃないか」ということになりました。「普段何気なく自分の周りにいる人たち、お母さんだったりお父さんだったりを、そこまで大事に思える」、「涙が出るほど大事なんだって見つめ直せる」、「保護者が自分のことを凄く大事に思ってくれていることに気付く」、そういう自分と家族を見つめ直せるような発問がいいね、そういう発問ができたらいいいよね、とい話でまとまりました。



グループ3



グループ7

西本 黒潮町立佐賀中学校の西本です。グループ7では、“リアリティ感のある授業をどう作るのか”ということについて話をしました。やはり、防災教育をしていて「教師が本音で語れる」、そして「子どもたちが本音の意見が言える」、そういった授業環境のなかで、本音を伝えあい、繋がることが一番大事ではないかという話ができました。教師は防災教育の中では、自分の本当の気持ちをさらけ出して授業をしていく。

そして、授業中のつぶやきや感想の中から見えてくる子どもたち一人ひとりの気持ちを大切にしていける。それが“教師と子どもの繋がり”であり、それが“リアリティ感のある授業に繋がってくる”のではないかと。そして、この授業が日常生活、現実の生活に繋がっていけるように、教師と生徒が一体となって防災教育を進めていく。そのように授業を進めていくことが大事ではないか、ということをお話ししました。



西本 貴俊先生

林 串本町立古座小学校の林です。グループ1は、いろんな意見が出ましたが、一つ目のテーマ『児童の心に響く』というところで、ビデオを見た感想や意見が一番多かったです。その中で、子どもに『すごい葛藤のある授業』でした。小学校の場合、一年生から六年生まで発達段階が全然違いますので、「低学年、中学年、高学年でも可能なのか」、「低学年で可能なんだろうか」という意見が出ました。

ビデオの授業は、『子どもたちに「逃げなきゃいけない」ことを教える授業』ではなかったんじゃないかと思います。あの授業で、子どもたちが心を揺さぶられる、心が揺れてどうしたらいいかわからないから、家に持って帰って家族で話し合う。授業の中で「逃げなきゃいけない」と答えが出て、それで終わりではなく、あとで家族と「あのようなきはどうしたらいいんだろうか」を話し合う。そうすることで、家族愛とか家族の絆を見つめ直すための授業だったんじゃないかと思います。この授業を行ったことで、そのあとに行う防災教育の中で、「じゃあ、あんなことにならないためには、こんなことをやっておかないといけない」という気持ちが、すごく生きてくるんじゃないかな、という話になりました。



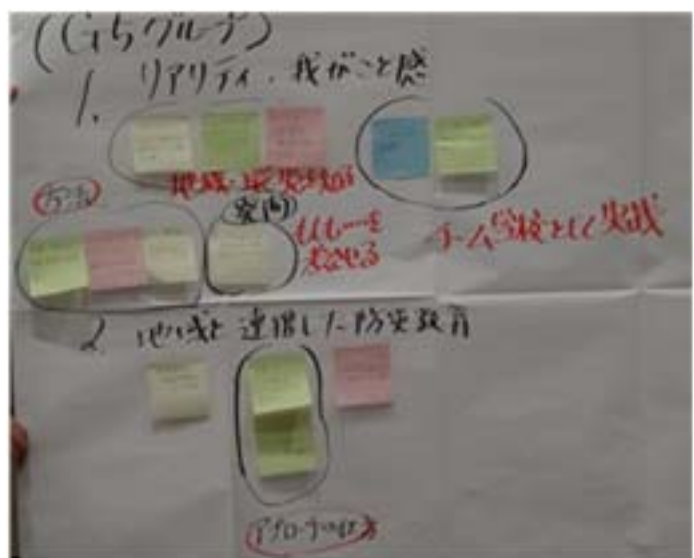
林 宣之先生

文野 黒潮町教育研究所の文野です。グループ5では、まずリアリティを学ばせるためには、地域の状況とか環境というのがすごく大事になってくるんじゃないか、という意見がでました。特に地域の被災経験者から話を聞いて、そのときの状況を児童生徒にわからせていくことは大事じゃないか。それから、地球温暖化などの環境問題と併せて、災害に目を向けていくことが大事ではないだろうか。という話が出ました。



文野 友喜 所長

発問については、もしもの状況で子どもたちに考えさせることで、心揺さぶる、葛藤させる、悩ませる、そういったところが大事じゃないだろうかという意見がでました。そういう発問は必要だという話になりました。それから“わがこと感”については、もちろん教師の意欲やる気は大事ですけど、教師一人ひとりでは防災教育はできない。やっぱりチーム学校として、とにかく全員が実践して、協働していくことが大事じゃないだろうか。という話になりました。



グループ5

池上 黒潮町立三浦小学校の池上です。グループ2では、ビデオで見せてもらった授業の話をさせてもらいました。他のグループでも言われていましたが、確かに両方の意見がある、という話ができました。けれど、「やっぱり命は教えたいね」ということでまとめ、そのためには、「工夫をしながら教えていかなきゃいけないな」という話をしました。

金井 各グループから一通り、一つ目のテーマについて、議論して頂いた内容を発表していただきました。片田先生、ここまでの発表を聞いて、コメントをお願いします。

片田 「両方の意見があるという点が、実は僕も一番引っかかっています。これまでも僕自身が、『命を見つける』ということを通じて、そのリアリティを実感し、子どもたちが実際に行動をとれるようになる」というシーンをたくさん見てきました。そういう面

では、「命に関わることのリアリティを与える」ということは、この心を“揺さぶる授業”の非常に大きなポイントになっていることは間違いないですね。

ただ、話題そのものが、あまりにも厳しい。釜石の子どもが本当に一生懸命逃げようと思った理由は、「僕が逃げれば、お母さんが逃げてくれる」という思いなんですよね。その教え方が良いのか悪いのかはともかく、アウトカムとしての行動結果は良かったんですね。しかし、「だから、いいんだ」という話にはならないような気がするんです。このあたりが僕にとっても一番悩ましいところですね。ある程度の学年になって、災害による死というものをいろいろと見聞きするなかで、「人には寿命が尽きるというときがあるんだ」ということを、子どもたちが心の中で消化できるようになった年齢ならばいいんだけど、そうじゃない学年の小さな子どもにはきびしいのかなと。今でも正直、「あの教育は良かったんだろうか」と思うようなシーンがたくさんあります。

小学校低学年の子どもたちに、「先生はみんな逃げると思うよ」、「でもみんな皆が逃げた後に、みんなのお母さんどうするだろうか」と問いかけたときの子どもの不安げな顔。「お母さんが迎えに来ちゃう」と言ったあの子どもたちの顔を思い出すと、厳しかったかなと正直思います。あの子たちの心の傷になってなきやいいけど、と思うことも正直あります。

その点が一番気になっているところではあるんですけども、“心を揺さぶる”ということにおいて、やはり“命をダイレクトに扱う”ことほど効果的なことはないと思います。子どもたちは、「お母さんが迎えに来る」と思っている。しかし、「その結果、お母さんがどうなってしまふのか」というところに思いが及んだときに、初めて「自分の命を投げうってまで迎えに来てくれる親」のありがたさを意識する。これは、日々日常の生活の中で言わずもがなで理解していることなんですね。当たり前のように、敢えて再定義するまでもなく、別にありがたいと思わずとも、「お母さんはそんなもの」と思っている。

ところが、災害はそれをも全部破壊しつくす。「それがなくなる」という現実を認識させる



池上 巖先生



片田 敏孝先生

ために、「津波のとき、お母さんが迎えに来る」、そして「お母さんの命が危ない」というところまで、こちらが子どもたちの思いを導いていくことで、そこで初めてリアリティが出てくる。「自分の命がまずい」、「自分の命だけではなく親も命もまずい」というところまで思いが及んだから、「僕は逃げよう」と子どもたちの内発的な避難意欲がでてくる。でもそれは、自分ではなく他者の命を見ているから、自分の命や行動を改定することができるんですよね。

災害心理学をやっていると、災害に向かい合う心の特性には二つの大きな特性があります。その一つが『正常性バイアス』です。自分の命がなくなるということを前提に、人は物を考えないという特性ですね。「あなたの命が危ない」、「逃げなきゃ死んじゃうぞ」とどれだけ言われても、『津波で亡くなっていく自分の姿』をリアリティを持って想像できる人なんていない。だけど、これを他者に話を転じると、客観的に見られるようになるんですね。いくつか事例をだしますね、「今この瞬間で震度7の地震があったとする」、「一分後、十分後、一時間後、自分はそれぞれ何しているか」を考えてみてください。おそらく多くの方は、「一分後は机の下に頭突っ込んでいる」、「十分後は建物の外に出て身の安全を確保している」、「一時間後は瓦礫の下から人を救い出している」と答える。そこで誰も言わないのが、「自分は瓦礫の下で死んでいる」ということです。要するに「自分は命あるもの」として常に人間は物事を考えていくわけですね。そうすると“自分の死”というものを前提に議論を吹きかけられても、自分の命の問題は、横っちょに置いちゃうんです。

そうは言っても、実は頭の中ではわかっている。それが二つ目の話です。頭の中でそういう状況はあり得る。「逃げなきゃ命がなくなっちゃうよ」と言われれば、知識としては、それがわかる。その一方で、「行動を取らない自分」がいる。こういう状態を認知的不協和といいます。「わかっていること」と“やっていること”が乖離している状態は心理的に気持ち悪いです。そこで、人はこの状態を解消するために、いろいろと理由をつけて整合化するんです。このとき、だいたいの方は“逃げていない自分”を正当化します。「だって今までそんなこと起こったことない」、「前に来ても大丈夫だった」、「津波警報なんかでたって津波がきたためしないじゃないか」というように理由は何でもいいんです。「周りのみんなも逃げてない」でもいい。何でもいから正当化する理由は探すと簡単に見つかる。このようにして、逃げない状態ができあがっているのです。

こういう特性があるなかで、「逃げなきゃ死んじゃう」と『自分の命の問題』をダイレクトに指摘し、「だから逃げなきゃならないんだ」と言っても絶対駄目ですね。絶対駄目です。またそれは人間らしい心の特性でもあるんです。だから、『自分の命の問題』からちよつとずらして、『母親の命の問題』として考えさせる。子どもたちにとって一番大事なものを事例に出して、それが最大級の地震でどうなっちゃうのかを考えさせる。これがリアリティに繋がっている。お母さんだけでなく、他の人を対象とした事例もあります。それは、「ご近所のおじいちゃん、おばあちゃん」です。それだったら、子どもたちは客観視できるんですね。ビデオを見て、「ものすごい津波が迫ってきている」、「あの杖ついたじいちゃん、逃げられるか」と言った段階で、彼らがすごく冷静に客観的に考えることができます。他にも「あの保育園の子どもたち、あんなにいっぱいいるのに保育士さん三人しかいない、あれは無理だな」と言う。あの子たちをどう守ってやるかというところから考え始めて、行動するうちに、それが『自分の命の問題』として捉えられるようになり、正常性バイアスを払拭することにも繋がっていく。

ダイレクトに正常性バイアスを払拭させようと思っても駄目なんですね。これは教育のテクニックとして覚えておいて頂きたいですね。どれだけ、君の命が危ないんだってことをどれだけ言っても駄目です。頭でとりあえずはわかります。でも人間ってのは、わからないもんだということを前提に、教育の現場ではあたって頂きたいです。だからこそ、横に“ずらす”んです。お母さんとか近所のじいちゃん、ばあちゃんとか、小さな子どもたちとか、そういう形で、“ずらす”ということを考えて頂きたいと思いますね。

先ほど太田先生の授業もそうですが、それぞれの現場にで“心を揺さぶる”というところをバラエティに富ますことはできると思うんです。でも、やはり『言わずもがなで受けている愛情の存在』ということに気付かせること。そして『災害は、それをも破壊するもの』だということをお知らせすることが、心を揺さぶることに直結しやすい話題ではないかなと思います。とにかく直接的に「君の命がまずいんだ」とか、「この地域は危ないんだ」とか、当事者として命の議論をしても駄目なんだということを、皆様の頭に留めておいて頂くと、今後の授業なんかの計画に少し参考になるかもしれません。

金井 各グループで一つ目のテーマで議論して頂いた内容を情報共有させて頂き、それを踏まえて片田先生からコメントを頂きました。黒潮町でも、今年二回の研究授業を同じようにやらせて頂きました。『命の教育』の授業実践を先生方が見て、その内容について議論しています。また、ビデオを見て頂いた田辺市でも同じように研究授業を通じて、『命の教育』には「どのような投げかけがあって、どういう授業がいいんだろう」ということを議論しています。一つ目のテーマについては、やっと議論がまともに行えるような地域がだんだん出てきた、という状態だと私は思っています。今日の議論を持ち帰って頂いて、ご自身でやってみたりとか学校で実践してみたりして頂いて、そこで得られた知見などは、各地域、各学校、各教員だけで持っていないで、ぜひ情報発信して頂きたいと思います。それを踏まえて、また継続的に議論していただきたいと思います。

二つ目のテーマ『地域と連携した防災教育』について、同様に各グループで議論した内容の発表をお願いします。

山本 和歌山県田辺市立大塔中学校の山本です。グループ8では、まず先ほどの太田先生の授業についてのお話をしました。「他にも違ったリアリティの伝え方があるんじゃないか；という話になって、やはり、例えば「今こう会議をしているときに地震が起こったらどうするは」ってことを考えることがリアリティじゃないか。また、「避難する途中に通る家の中に、いったい高齢者が何人いるのか、小さな子どもが何人いるのか」、そういうことがわかることで、よりリアリティを高めることになるんじゃないか。「避難経路に人が倒れていた場合、その人を運ぶと避難完了に何分かかかるか」とか、そういうこともあり得るのではないかとこのように、ちょっと視点を変えた話し合いをしました。



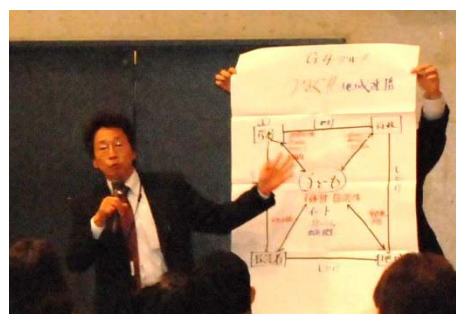
山本 博章先生

防災教育は、命が関わってきて、どうしても重たくなってしまいますので、子どもたちまた職員も、ちょっと辛くなってくるのではないかとこの話ができました。そこで、より前向きな発想を

生むような取り組みに変えていったらどうかということができました。生徒主体でいろんな地域に向かって情報を発信したり、案を出したりする。「避難経路のどこで壁が崩れてくるかもわからない」とか、そういったことも子どもの方から出てくる。その後「どうしていけばいいか」ということも、生徒主体で引き出していくという形に持っていく方が、教師側も長続きできる。そして、先輩たちが頑張っている姿を見て後輩たちが憧れて、「自分たちも先輩たちに続け」と良き伝統としていって、少しずつ改善していくという流れを作っていってはどうかという話になりました。

山本 黒潮町立拳ノ川小学校の山本です。グループ4では、『家庭と地域の連携』というキーワードは、やっぱり児童生徒を中心にして、如何に学校や行政、地域、保護者に仕掛けてくるかと。その仕掛けはやっぱり学校が、子どもたちに対して色んな働きかけをしながら実践していく。今日の討論を聞いていると、その効果があったんだろうと。だから、まだまだこの部分の伸びしろいっぱいあります。子どもたちに、如何にして、その地域の独自性とか、学校と地域、学校の独自性を生かした働きかけの手法を伝えていくか。それによって学校も地域も変わっていくし、何よりも子どもたちの主体性やコミュニケーションの能力だとか、いろんなものを高めていくことができるというのを再確認でできたのではないかなと思います。

最後に、「やっぱり黒潮町、すごいな」と思ったのは、町内10の小中学校が同じ方向を向いてやっているところは、全国に発信できる素晴らしいことだなと改めて思いました。「本当に良かった」という声がグループ討議の中ででてきました。



山本 明彦先生

宮川 黒潮町立大方中学校の宮川です。グループ9では、「リアリティ」などについて話すことに始まったんですけど、体験とか実感とかいう話になっていきまして、最後は、「つなぐ」という話になりました。そのなかで、防災授業の実践を促すために、『どこが中心になっているか』が各地区で違いました。黒潮町は、防災教育の作業部会として担当者会もありますが。先ほどの発表にもありましたが、一方で黒潮町は行政というか黒潮町全体が同じ方向を向いてやっています。これは珍しくて、学校が中心にやっているとか、学社融合とかいうところもありました。学校が中心になってみんなを動かすのは、なかなか大変だということも出ていました。



宮川 昭二先生

また、「つながる」ということでは、子どもたちが地域を知り、それを子どもたちが情報発信して、地域がそれを知る。地域に知ってもらうことで子どもたちに達成感がでてくる。このように、「学校や子どもたちを地域に知ってもらうこともいいんじゃないか」という話がでていました。『子どもたちが地域に自信を持つ』ためには、地域と“つながる”防災教育が必要だという意見が出ていました。





グループ 4



グループ 9

筒井 黒潮町立大方中学校の筒井です。グループ6では、出し合い話みたいになりましたので、出たアイデアを紹介したいと思います。

まず話のなかで、「避難訓練がマンネリ化してきて、リアリティがなくなっていく」というところがありました。佐賀中学校は地域の人も巻き込んで避難訓練をしていますけど、「坂道を登るのにおじいさん、おばあさんは、「もうここまででいいや」と諦めがちなところがある」という意見があるそうです。そこから発展して、何かイベントを作ったり、楽しいことを作ったりして、まずは学校にきてもらえるようにする。そして、学校に来てみたら、「実は避難訓練でした」というようなことができれば、もっと楽しんで前向きに取り組めるんじゃないかという話をしました。

出てきた意見の中でとても面白かったのは、海上保安庁にへりを呼んでもらうことでした。先方の訓練も兼ねることで、全部手配してきてくれた事例もあったそうです。これを警察に相談すると、書類やら何やらがすごく大変みたいで、直接海上保安庁に連絡すると上手くいったというお話もありました。

また総合的な学習の時間も選択制にすると、子どもたちの中から自主的に取り組みが生まれるのではないかという話もありました。地域の方が、避難したことがわかるような絵札を作って地域に配ったり、過去の経験者に話を聞いて DVDに残すとか、そういう取り組みもしている学校があるということをお聞きしました。



筒井 祥子先生

金井 『地域とのつながり』について発表していただきましたが、私は最後のグループ6で発表していただいたことが現状の全てなのかなと思いました。先生方、みなさんいろいろ実践されているんですね。例えば避難訓練であれば、地域の人と一緒にやるのもそうだし、海上保安庁なり消防を呼んで一緒にやる、また校区の避難馬場所を確認するために地図作ったりとか。まだまだいろいろとやっていると思うんです。これからは、そのやっていることに一工夫していきましょう、その際には子どもたちの成長を中心に考えて、家庭や地域などとの連携方法を考えてみましょうということなんだと思います。やる内容が決まっている学校行事などとしてやるんじゃないくて、子どもたちの自発的なアイデアから実践につながるように仕掛けてあげるとか、実践する場を作ってあげるとか、子どもたちが実践したことを地域の人たちに発表したりとか、今までやってきたことに何かプラスアルファ、もう一工夫というか、もう一努力していただくことで、子どもたちの次の主体的な行動に結び付くものと実感しております。

片田 『地域とつながる』ことの大事さは、もう散々冒頭から議論があったと思うんですね。やはり、「どう前向きに防災教育をやっていくのか」、そして「その前向きな仕掛けをどのように入れ込んでいくのか」というところが非常に大きなポイントになると思うんですね。小木中学校の例もそうですが、防災教育に悲壮感がないことはすごく大事で、もちろん話題は命なんですけども、子どもたちが保育園の子ども達に一生懸命こう避難訓練させていたりする。どれだけいきがっている中学生でも、保育園の子どもが「お兄ちゃん」と言ってなついてくれば、いきがるわけにもいかないわけですね。その子を「守ってやりたい」という気持ちが、子どもたちの中にできるわけですね。それが子どもたちのやりがいになり、その結果、保育士さんに感謝され、そして小さな子どもたちのお母さんにも心強いと思ってもらえる。このような経験を通じて、自己肯定感を高め、やる気満々になって「さあ次何やろうか」となる。小木中学校が上手く続いていったのは、そのループが上手く繋がっていつているからです。そういう良いループに入って、はじめて防災教育は継続性ができると思うし、やる方も辛くないですよ。楽しんでできるようになると思うんですね。

僕は防災教育が、よく言うように、“脅しの防災教育”であってはならないと思っているんですね。もちろんリアリティを与えるために必要なことなんですけども、でもそれだけでは絶対によくないんですね。やっぱり『地域に誇りを持つ』ことが一番大事ですよ。『大好きなこの町に住み続けるためのお作法』と僕は言っています。「海に近づいて、こんなに綺麗な海があって、こんなに美味しいお魚がいっぱいある」、「でも海に近づいているんだから、ときには荒ぶることもある」という自然の正しい理解ですよ、「そんなこともある、でも大丈夫だ」、「その日そのときに、パチッと逃げられる自分であるればいいんだ」と理解する。「大きな津波がこのまちに襲ってくるんだ」「逃げなきゃ死んじゃうぞ」と教えて避難訓練をするもの一つの方法です。でも、お作法として避難訓練やるのも同じ避難訓練なんですよ。避難訓練一つとっても、アプローチによってどれだけでも明るく持っていけますよね。

さらに、重い話でも子どもたちが、誰かから褒められるような仕掛け、子どもたちが肯定されるような仕掛けというものを作っていく。子どもたちがやったことを地域の方に褒めてもらう。それを受けて、子どもたちはさらに次に何を考えるのかを考える。みんなに喜んでもらうためには何をしたらよいかを考えるわけですから、前向きに物事に取り組みますよね。このように考えると、『地域との連携』は、子どもたちを褒めてもらうためにでもいいと思うんです。

子どもたちが次の一步を踏み出す推進力を得るために連携する。大阪の報告でもありましたけど、子どもたちが行けば「みんな OK」だと。どこでもそうですよね。子どもたちの発案、子どもたちがやることに對して否定的な話なんか出てきたりはしませんよ、子どもたちを褒めてもらって、次の一步を踏み出すための推進力を得るために地域と連携していくというのも、重要なポイントなんだろうなというふうに改めて思いました。

『地域との連携』は、いろんなパターンがありましたよね。黒潮町はやっぱ凄いんですよ。町全体をあげて、全部の学校が同じ方向を向いて、同じように動けるなんていう町はそうないんです。どこの町も学校によって温度差がある。そのときの管理職の姿勢や、一人二人の担当の先生のやる気、そういったものに左右されて、学校間でかなりのバラつきがあると思います。でも黒潮町は違う。何と言っても、日本一の津波想定がある。この御旗のもとに、みんなで頑張っていく。だから「一番で良かったじゃないか」という話になるんですけども、黒潮町はある意味特別な例なんだろうと思います。

ただ、『地域との連携』のパターンとして、「どう教育委員会が絡むのか」、「どう役所の防災が絡むのか」というところは非常に重要なポイントになります。小木中学校のように、「頼る相手がいないので、自分でやるより仕方なかった」という例もありますが、これもご特別な例でしょう。一般には、市町の防災部署と教育委員会が一緒になって、そしてそこにやる気のある先生方も一緒になり、全体が前を向いてやっていくという方向に引き上げていくことが、非常に重要なんだろうと思います。地域によって、「教育委員会が各学校を取りまとめ、そして共有しながら、次から次へとリードしていく」という地域もあれば、「各学校がやっていることをただ報告させてとりまとめる」だけという地域もあり、様々です。しかし、教育委員会の力だとか、町の防災の姿勢だとか、もっと言うならば組長の姿勢だとか、こういったものが、『地域の連携のあり様』決定的に影響を及ぼすことは、明らかなことだろうと思います。

また、より多くの連携があればあるだけ、推進力ができるという事も事実だろうと思います。今日ここにお集りの方々はほとんど学校の先生方です。先生方だけでどうにもならない部分は確かにありますけども、どのようにして地域の仕組みとして動いていけるように連携を深めていくのかも重要なポイントかなとは改めて思いました。黒潮町は特別な例ですが、理想形の一つだと思います。「この町から犠牲者を出さない」という思いのなかで、皆が前を向いていけるような地域であるといいなと思います。そうすると、多少人事異動があっても、何とかかなというような感じも致します。

人事異動の話もあって、『自校化』が冒頭の話題になりました。防災教育の取り組みは先生に依存するべきものではないと本当は思います。その学校に根付いていくという形をどう作るのかというのは、大きなポイントとしてあるように思います。まだまだ先生方、個人個人に委ねる部分が非常に多いというのが現実なんですけども、この動きが定着し、そして各学校で防災教育が、『自校化』できるような取り組みにしていくことが必要です。個人プレーで動いている間は、継続性は低いと思わざるをえないと思います。もちろん、そういう先生方の個人個人の頑張りの広がり、『自校化』つながることになりますので、今まで通り頑張っていたいただくことはもちろん大事です。防災教育を学校、地域にどのように根付かせていくのか、そのための連携内容は考えていくことも大事ななと感じました。

金井 二つのテーマについてグループディスカッションで議論して頂きました。

ここで議論している内容は、他に地域や集まりに行くと全然かみ合わないことが結構多いと私は感じています。二つ目のテーマとして議論して頂いたような、「地域を巻き込んで子どもたちの主体性を高めたりとか、思いやりを高めたりするような授業を実践しましょう」という話は、ここでなら共通理解が得られて、議論することができます、昨年今年と、全国の小中学校を対象に防災教育の実施状況を把握するアンケートを2回実施させていただきましたが、その中に教育効果を図る項目として、「いじめがなくなった」とか、「学力上がった」という項目を把握してみました。すると、それらに項目に全く当てはまらないと回答して頂くだけでなく、「何で防災教育をやって学力上がるかが全く理解できない」というコメントが付け加えられたりしていました。確かに防災教育を「防災について教えること」として捉え、学力向上を「学力テストの点数が上がること」と捉えると、これらを直接結びつけるのは難しいとは思いますが。でも今日、改めて実感しましたよね、防災を通じて主体的な姿勢が高まって、何でも一生懸命やるという姿勢が身につくにつれて、それが日々の生活態度の改善につながり、その結果として学力も向上した。そのメカニズムが理解できたような気がするんですね。またこの理解が当たり前だと言える社会にはないかもしれません。せつかく志を同じにして、思いを同じにできるメンバーに集まって頂いたので、今日でこれでおしまいじゃなくて、この後もそれぞれで情報交換して頂いて、“つながり”を持って頂ければよろしいかと思います。

以上